

意見書

H18.5.11

基本高水の選択について

- ・ 昨年 8 月に基本高水について意見を述べたとおり、「実績降雨群を計画降雨量まで引き伸ばした降雨群のうち、・・・時間分布、地域分布が極端に偏った降雨を棄却して残った降雨群はいずれも治水計画として考慮すべき必要性があるため、基本高水のピーク流量としては、これら降雨群を用いた計画流量の最大値を採用したい。」と考えている。
- ・ いま 2 つの選択肢である H16 型(4,700 ではなく、4,900 m³/s)と S37 型(4,000 m³/s)について棄却検定結果をみると、違いは「それぞれ 1.4 と 1.7 という倍率の引き伸ばしのもとで、H16 年型の 6 時間雨量(187.8 mm)が棄却基準(176 mm)を約 12 mm 超えるのに対し、S37 型は棄却基準内に収まる。」という点である。
- ・ はじめに述べた原則的な考え方から言えば確かに H16 型は棄却されるべき降雨となるが、原則を機械的に適用して S37 型と結論づけることには、いささか釈然としない。ピーク流量が 4,900 m³/s から 4,000 m³/s と、900 m³/s もの違いがでてくるが棄却基準を超える程度(6 時間で 12 mm)を考えると、基本高水が 4,000 まで下がる S37 型が武庫川流域の基本高水でいいのか。

H16 年の台風 23 号は、流域住民が経験した直近の洪水で、これと関連づけて、H16 年型降雨を棄却基準内に収まる範囲で引き伸ばした場合の試算結果が 1/60 確率で 4,500 m³/s というピーク流量となっている。この流量は、我々が設定すべき計画規模(1/100)の値ではないが、参考値として考慮する必要がある。

このところシャープな降雨パターンが出現している傾向にある。

整備計画の目標値について

- ・ 武庫川の下流域は築堤河川で、沿岸には高度な市街地が広がっているため、整備計画の目標水準としては、武庫川の重要度に応じた治水安全度に少しでも早く到達できるよう、実現可能な範囲の中でより高い水準を目指していくべきである。
- ・ それでは、河川整備計画の目標はどの水準が妥当かであるが、以下の点を考慮する必要がある。

既往最大洪水をカバーできる水準であること。

武庫川における既往最大洪水は H16 年の台風 23 号で、このときの流量(甲武橋地点で 2,900 m³/s)を上回るものとしたい。

上下流のバランスと継続性を考慮した水準であること。

すでに実施してきている河道対策事業等の継続性と上下流のバランスした整備水準が望まれる。

このことが、H16 年型降雨で 1/20 か 1/30 か、基本方針レベル 1/100 との組み合わせでいえば 1/30 といいたいが、まだ明確にするまでには至っていない。

新規ダムの河川整備基本方針、河川整備計画への位置づけについて

- ・ 河川整備基本方針レベルでは洪水調節施設の 3 つの対策案を検討している内容からすれば新規ダムは入ってくる。青野ダムの治水効果をさらに高めることはいけそうであるが、既存の利水ダムの活用や遊水池の新設はかなり厳しい。流域対策は机上では見積もれても、整備計画期間での到達には限界があり、引き続き整備基本方針で関係者、関係機関との調整・協力により効果目標値を目指す。
- ・ それでは、整備計画レベルでは新規ダムはどうか。これには整備計画の目標値をどのような水準に設定するかにかかってくる。自分としては先に述べたように H16 年型降雨で 1/30 を考えたいが、まだ明確にするまでには至っていない。
- ・ 当然ながら、新規ダムを入れた場合には環境が受ける影響は大きく、環境影響の予測・調査やその軽減策を検討した上で、治水便益との総合的な評価を下していくことが必要である。

池淵周一